

## 「酪農に対する私の夢・理想」

長野県更級農業高等学校  
生物科学科 3年 吉原 祐弥

## 1:はじめに

長野市の西部に位置する信州新町は、平坦部はごくわずかで、標高400～1100mと起伏の多い山間地帯にあります。人口は、昭和22年の約14000人を最高に、年々減少し、現在は5500人程度と過疎化が進んでいるのが現状です。かつては、酪農をやっている家も多かったようですが、今ではたった3軒になってしまいました。私の家の経営は、搾乳牛が30頭です。朝早くからの搾乳や餌やりの作業は、かなりの重労働です。また、父は、以前ミルクローリーで牛乳を集める「集乳」の仕事をしていたため、特に衛生面には細心の注意を払っています。月3回行われる検査で合格できるように、かなり気を使うため、緊張した作業が続き、心身ともに疲れ果ててしまいます。このような状況から、現在では、長野県の酪農戸数が減ってきています。10年前には890戸あった酪農家が、今では480戸と半減してしまいました。その結果、生乳出荷量も減ってきています。なぜこんなに酪農家が減ってきてしまったのでしょうか。

## 2:減少を考える

原因の1つとして考えられるのは、牛の餌の多くが外国に依存している輸入品であること、そして近頃値段が上がってきたため、経営が難しくなったことが考えられます。

2つ目の原因としては、牛乳の消費量が減少傾向にあることです。消費量が少なければ自動的に供給量も減っていくので、経営として成り立たなくなってきたなと考えています。

最近の牛乳の消費量を見てみると、特に飲用向けの消費が減ってきています。それは牛乳より手軽に飲むことのできる、ペットボトルのお茶やジュースを飲む手軽さがあると思います。なぜもっと牛乳もジュースのように飲めないのでしょうか。一時期「ペットボトル入りの牛乳が許可された」ということもあったようですが、「不衛生」「消費期限が短い」という理由などで、ペットボトルで販売することが禁止されています。しかし、よく考えてみると、牛乳の消費量が伸びない理由は、入っている容器や手軽さだけではないような気がします。

もう一つ考えられることは、今まで誰もが言ってきた、酪農を含む農業の「高齢化と重労働、食料を扱う精神的不安など」が原因だと私も考えています。

## 3:ヒントを考える

もともと日本人は、昔から米・野菜・魚を中心とした食性でしたが、食の欧米化によりパンや pasta、肉類を多く取るようになってから牛乳も飲まれ始めました。昔から肉や牛乳が食性である欧米人のように体が出来ていないため、「牛乳を飲むとおなかを壊してしまう」とか、最近ではアレルギー症状を持つ人が多くなり、それもまた牛乳を敬遠する結果につながっていると思います。しかし、飲用向け消費量が減少している中で、牛乳から作られた「加工品」いわゆる

---

「乳製品」は多くの人に好まれ、消費量が増えているのです。特にチーズは20年前に比べると2倍以上に増えているそうです。このことから牛乳をそのまま出荷するのではなく、いろいろな加工品にして販売することが、消費量拡大につながるのではないかと思います。酪農経営や牛乳の消費の問題点をあげる中で、私が目指したい酪農経営がほんやり見えてきました。

#### 4: 私の目指す経営

まず一つ目に、飼料作物を自家生産したいと考えています。今、私の住んでいる地域は過疎化が進み、休耕地や耕作放棄地が増えています。そこでそれらの土地を借り上げトウモロコシや麦を作れば牛の買い餌を少なくすることができます。また、酪農経営の問題点の中には糞尿処理もありますが、飼料作物を作ることで、堆肥化して利用することができます。酪農以外の休耕地や荒廃地に施すことにより土地が本来持っている力を生きかえらせることができ地域の農業の活性化につながるし、糞尿の利用価値も上がると考えられます。生き返った農地に青々とトウモロコシが茂り、黄金色に輝く麦が風になびく姿を想像するだけで意欲が増してきます。

2つ目は、酪農は牛乳生産だけではないと発想していくことです。例えば、人が集い様々な体験ができるような牧場にしたいと考えています。ポニーの乗馬や子牛・羊、うさぎなどの「動物とのふれあいができる」、乳搾り体験やバターやヨーグルトを作る体験ができる「ハンドメイド食品」、完熟堆肥を使った有機野菜の収穫体験ができる「ユウキのでる野菜づくり」などを消費者と交流したいと考えています。こうすることで、一人でも多くの人に農業や酪農の良さや楽しさ、安心できる食料を知ってもらうことなどから、目標の牛乳の消費拡大につなげて行きたいと思います。

3つ目は、命の大切さや、食の大切さを再認識してもらえる取り組みをしていきたいと考えています。最近では、全国の牧場で「教育ファーム」的な取り組み例が数多く報告されています。幼稚園児から大学生・一般と対象となる年齢層は幅広いのですが、中でも小学生が牧場を訪れ体験していくのが最も多いということです。犯罪の低年齢化という社会現象を背景に「命の大切さ」「命の尊さ」を生産現場で体験させることにより認識させたいというねらいがあるようです。また、食に対する認識も希薄化する中で、正しい食事のとり方や食に感謝することの必要性を認識させたり、安全な食料とは何かということを考えてもらえと思っています。

#### 5: おわりに

私の牧場を地元の小学校の「分校」として位置づけて、いろいろな勉強ができるようにしたいと思います。例えば「飼料作物チーム」「牛飼いチーム」「乳製品開発チーム」などにわけ、堆肥を使った畑作りから飼料作物の種まき・栽培管理、日常の牛の世話・牛舎の掃除、牛乳の加工と販売など年間通して定期的に活動・学習できる仕組みを作りたいのです。過疎化が進む小さな学校の中でいろいろなことを体験することは難しいことです。でも小さいから地域の

---

---

結びつきは強くなります。酪農の大変なことも楽しいことも体験させる中から、「命」の本当の意味を学んで欲しいと思います。

これらのことを実現するためには、施設や設備をはじめ労働力、地域の理解など、多くの問題や課題がたくさんあります。でも何も考えなかったり、実行しなくては少しも先に進めません。課題を一つ一つクリアしながら、自分で楽しく感じて、地域からも認めもらえる酪農経営に変えて行かなければいけないと考えています。まだまだ身に付けなければならない知識や技術はたくさんあります。牛のように歩みはのろくても着実に、確実に、地に足をつけ一歩一歩前に進んで行こうと思っています。

---